21年目の新たな第一歩

２００３年に労働大学が再建された証は、04年1月号として発刊された『月刊まなぶ』でした。幾多の困難を克服しながら先輩方々や仲間と読者に支えられて、月刊誌として23年12月号で２４０号、まる20年を歩んできました。今月号から新たな一歩を踏み出します。

まなぶということは、「すべては疑いうる」精神から始まります。あきらめから資本への怒りを組織するのが、『月刊まなぶ』拡大運動です。

１９６７年2月、私が19歳の時、三池炭鉱労働組合結成20周年記念集会に参加する機会がありました。その時、三池労働者の闘いと生きざまに驚きと感動に震えたことを今も忘れません。そこには三池の労働者運動で育まれた輝く労働者の顔がありました。初めて交流した主婦会の方々が、なぜか母のような気がしました。暖かみと優しさの中に、人生に誇りをもった凛(りん)としたものを全身で感じました。今も印象に残る三池の労働者の言葉があります。「労働者であって良かった、労働者として生きることに誇りを持っている」と言われた年輩労働者の言葉です。なぜか何もわからず感動しました。この言葉は、今日まで私の生き方の指針となっています。

今まさに、この言葉の意味することが問われています。人間らしく働きつづけ生きつづける、というあたりまえのことが、今、最も阻害され、つぶされようとしています。「人間らしく生きる」ということは、闘うことであり、一緒に闘える仲間をつくることだと思います。「労働者であって良かった」と、心から思える人生を送るためにも、『月刊まなぶ』がその一助になることを願っています。

労働大学学長　須藤　行彦